

は や ち ね さん しゅう へん

早池峰山周辺森林生態系保護地域

面積	計：8,144.17ha 三陸北部森林管理署：4,120.08ha （今回調査のプロット所在署） 盛岡森林管理署：480.78ha 遠野支所：3,543.85ha
設定目的 （管理方針書より抜粋）	<u>早池峰山周辺は、超塩基性の蛇紋岩質岩地域と非蛇紋岩質岩地域に大別される基岩の相違による植物相の対照が顕著であり、ブナ及び青森ヒバの名称で知られるヒノキアスナロ（ヒバ）を主体とする天然林が存在している。また、蛇紋岩質岩は崩壊を生じやすい地質的特性を有していることから、国土保全上留意すべき地域とされている。</u> これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林の管理・学術研究に資することを目的とする。
前回調査の評価・課題等	<u>ニホンジカの個体数が増加傾向にあり、森林内においては下層植生への食害も確認されている</u> ことから、周辺地域での生息状況及び保護林内の森林への影響を注視するとともに、ニホンジカ被害に対応した保護・管理を継続していく必要がある。
モニタリングの実施間隔	5 年

早池峰山周辺森林生態系保護地域

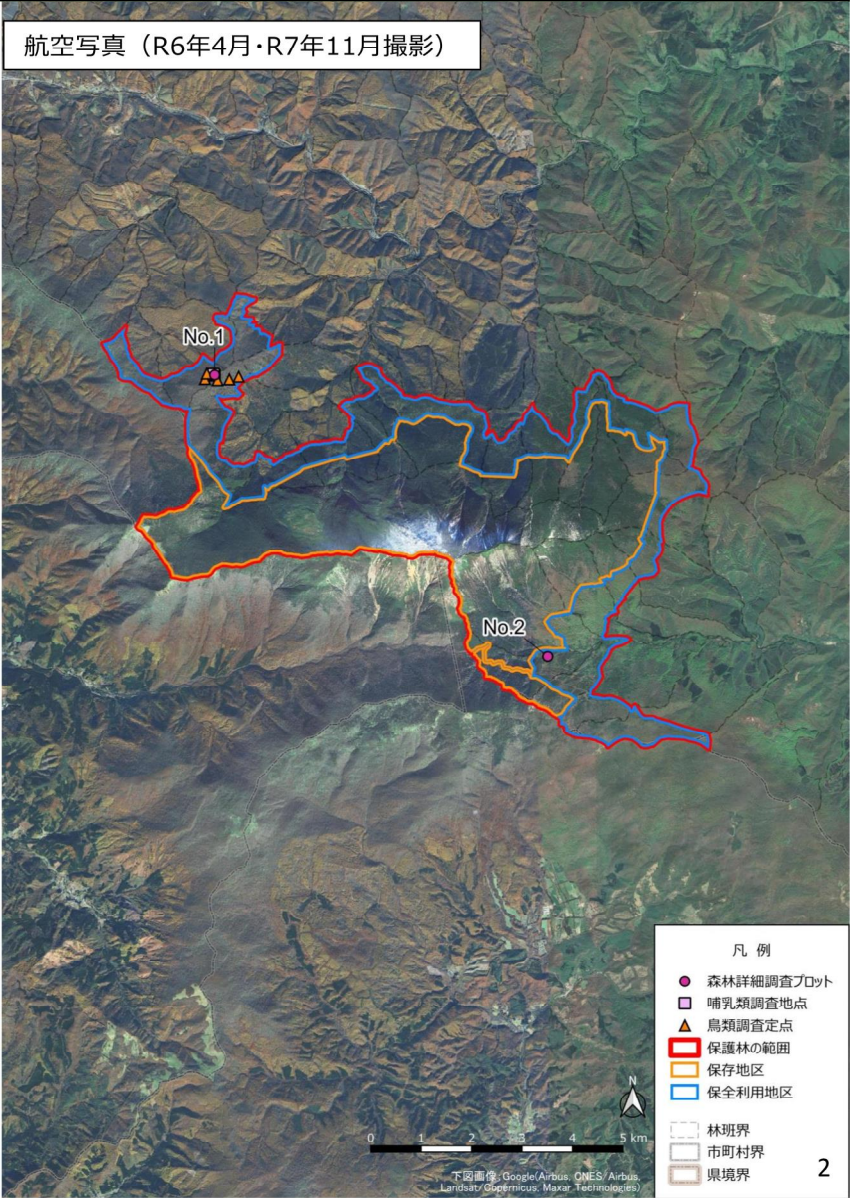
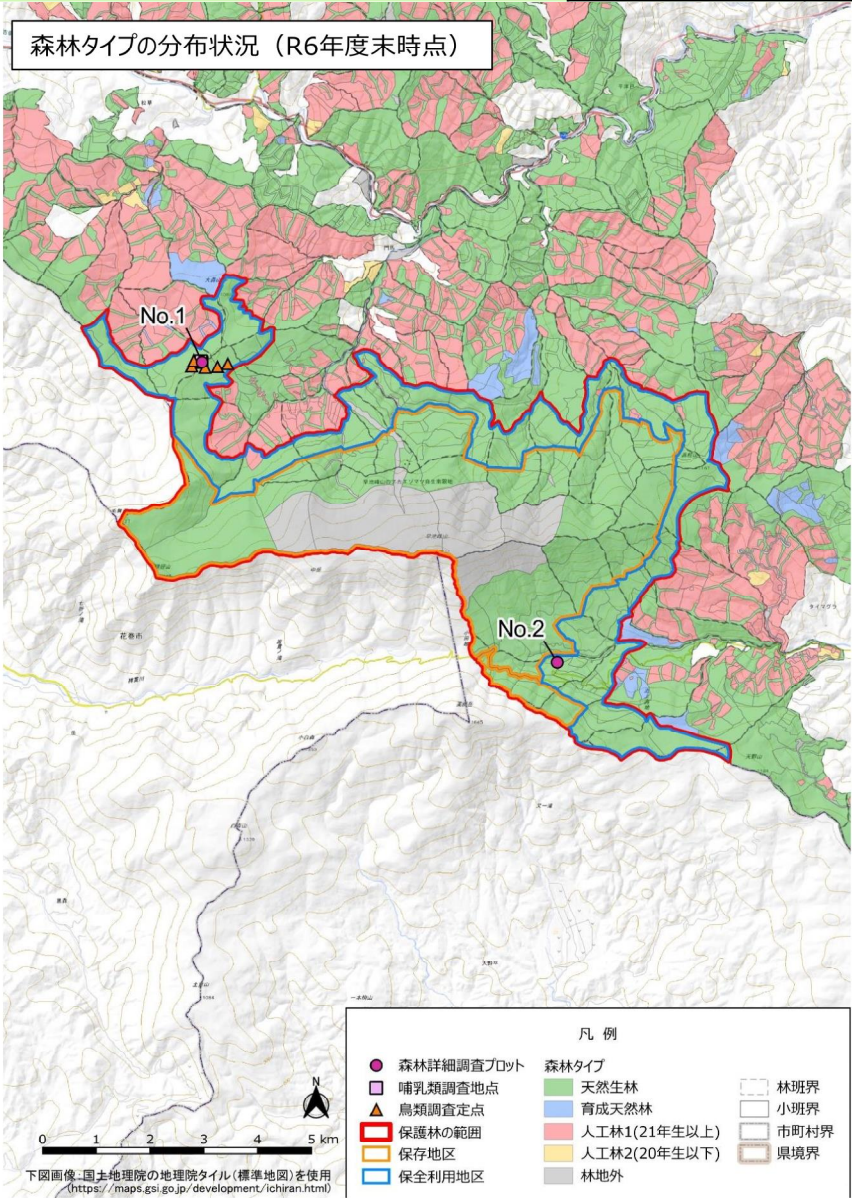
実施した調査

資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査

デザイン

超塩基性の蛇紋岩質岩地域と非蛇紋岩質岩地域に大別される基岩の相違による植物相の対照が顕著であり、ブナ及び青森ヒバの名称で知られるヒノキアスナロ（ヒバ）を主体とする天然林が存在している。

本保護林内及び周辺の森林タイプの分布に変化は確認されなかった。



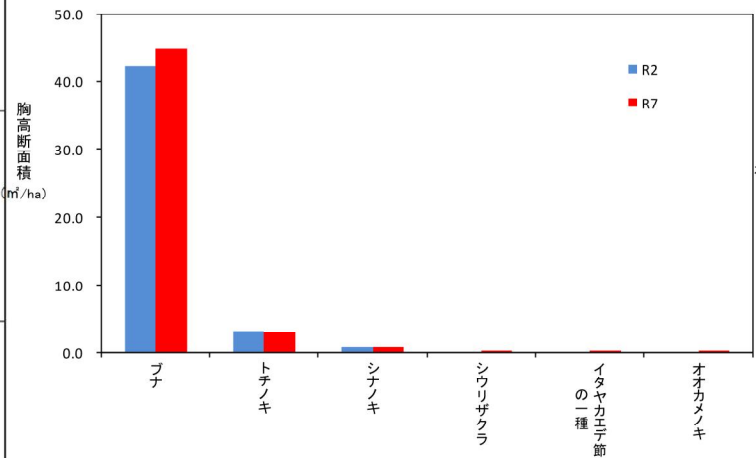
デザイン 森林詳細調査

プロットNo.1

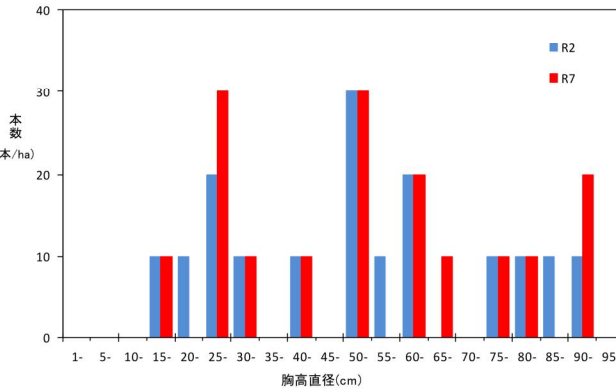
	R2(7月16日)	R7(9月15日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大きな変化はない。
天頂			小規模な林冠ギャップが生じた。

樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面積(m ² /ha)		胸高断面積割合	
	R2	R7	R2	R7	R2	R7
ブナ	53.2	55.1	42.14	44.84	91.5%	91.1%
トチノキ	62.6	62.1	3.08	3.03	6.7%	6.2%
シナノキ	32.2	33.2	0.81	0.87	1.8%	1.8%
シウリザクラ	—	9.2	0.00	0.33	0.0%	0.7%
イタヤカエデ節の一種	—	3.4	0.00	0.09	0.0%	0.2%
オオカメノキ	—	5.3	0.00	0.06	0.0%	0.1%
6種	—	—	46.03	49.21	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



1ha当たりの樹種別胸高断面積



ブナ（主要樹種）
1ha当たり胸高直径階別本数分布

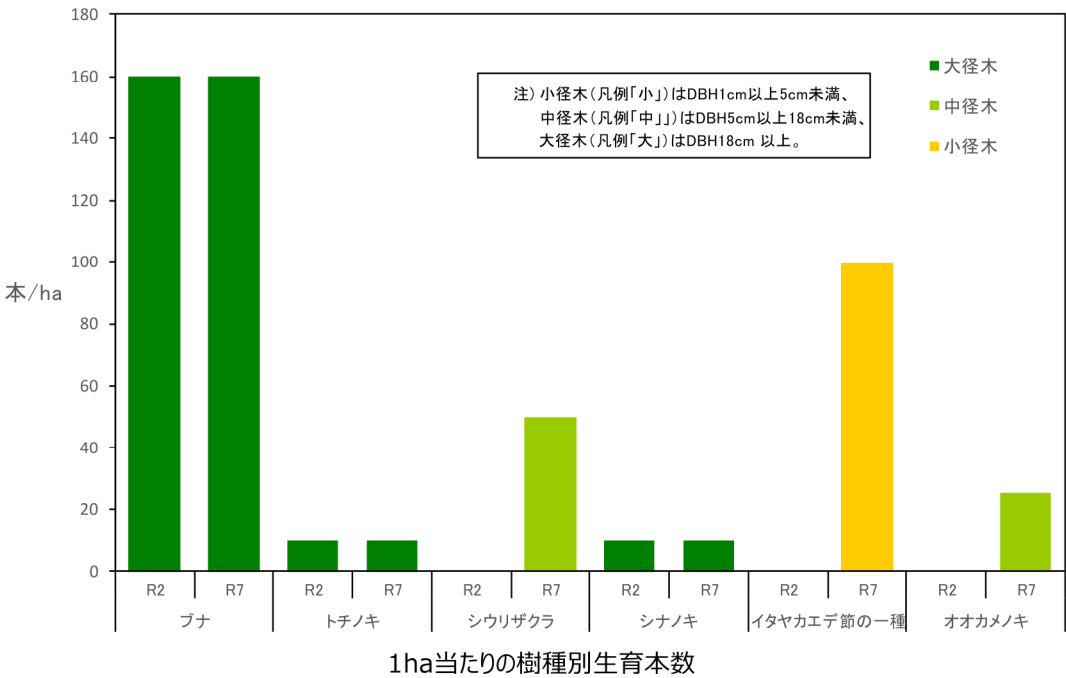
- ・ブナが優占する落葉広葉樹林で、林床はチシマザサに覆われていた。
- ・写真を比較する限り、林相に大きな変化はなかった。
- ・ブナが全体の胸高断面積の約90%を占めており、平均胸高直径等の増大がみられた。その他の樹種として、トチノキ、シナノキ等の高木の生育状況に大きな変化はなかった。

プロットNo.1

樹種	生育本数(本/ha)		本数割合	
	R2	R7	R2	R7
ブナ	160	160	88.9%	45.1%
トチノキ	10	10	5.6%	2.8%
シナノキ	10	10	5.6%	2.8%
シウリザクラ	0	50	0.0%	14.1%
イタヤカエデ節の一種	0	100	0.0%	28.2%
オオカメノキ	0	25	0.0%	7.0%
6種	180	355	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。

・ブナ、シナノキ、トチノキといった大径木の生育本数に変化はなかった。
・シウリザクラ、イタヤカエデ節の一種、オオカメノキといった小径木及び中径木が新たに確認された。



林内の景観



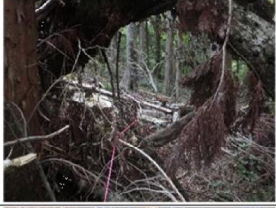
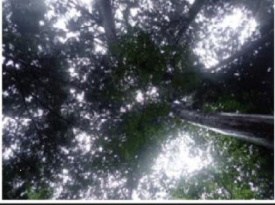
林内の景観

早池峰山周辺森林生態系保護地域

デザイン

森林詳細調査

プロットNo.2

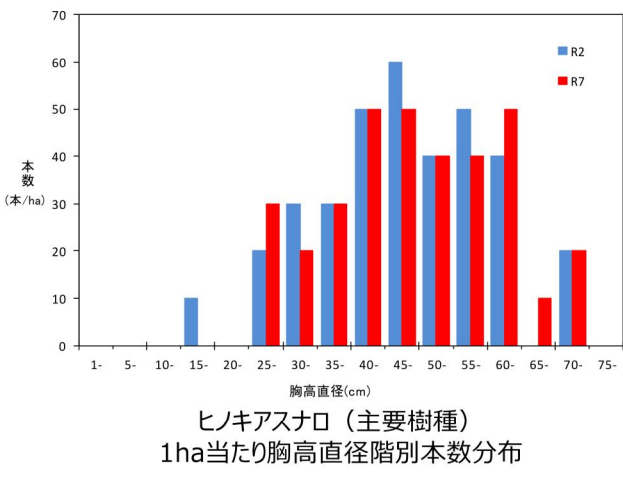
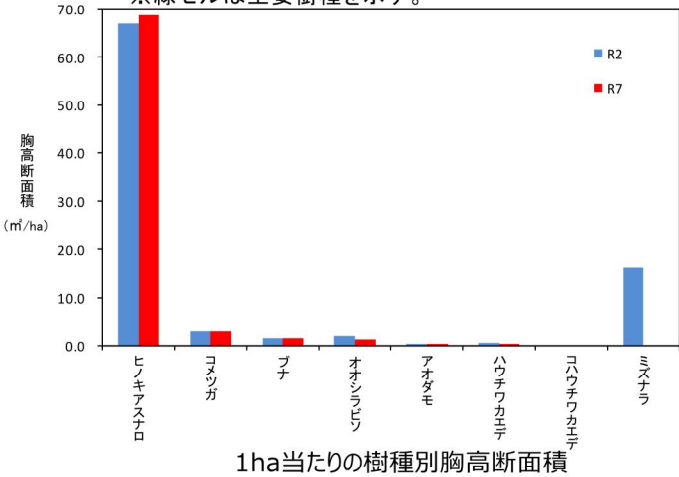
	R2(7月16日)	R7(9月15日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大木の倒木により林床が明るくなった。
天頂			大木が倒れ林冠にギャップが生じた。

実施した調査

資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査

樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面積(m ² /ha)		胸高断面積割合	
	R2	R7	R2	R7	R2	R7
ヒノキアスナロ	47.7	49.2	67.06	68.81	73.9%	91.3%
コメツガ	42.2	42.5	2.93	2.97	3.2%	3.9%
ブナ	43.1	44.6	1.46	1.56	1.6%	2.1%
オオシラビソ	16.0	16.3	1.96	1.27	2.2%	1.7%
アオダモ	14.0	14.2	0.38	0.40	0.4%	0.5%
ハウチワカエデ	10.6	7.3	0.61	0.34	0.7%	0.4%
コハウチワカエデ	2.9	—	0.07	0.00	0.1%	0.0%
ミズナラ	144.1	—	16.31	0.00	18.0%	0.0%
8種	—	—	90.77	75.35	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



- ・ヒノキアスナロが優占する針葉樹林であり、林床にはハウチワカエデやヒノキアスナロの幼齢木等が生育している。
- ・小円内でミズナラの大径木が風害で倒れ、大きなギャップが生じていた。
- ・ヒノキアスナロは平均胸高直径等の増大がみられた。コメツガやブナといった高木やアオダモの亜高木の生育状況に大きな変化はなかった。
- ・ヒノキアスナロの小径木（胸高直径1cm以上5cm未満）は前回調査時と同じように確認されなかったが、中径木（胸高直径5cm以上～18cm未満）や大径木でも直径階の進階がみられた。ただし、データには反映されない匍匐した小さい個体（伏条更新含む）は多数確認された。

プロットNo.2

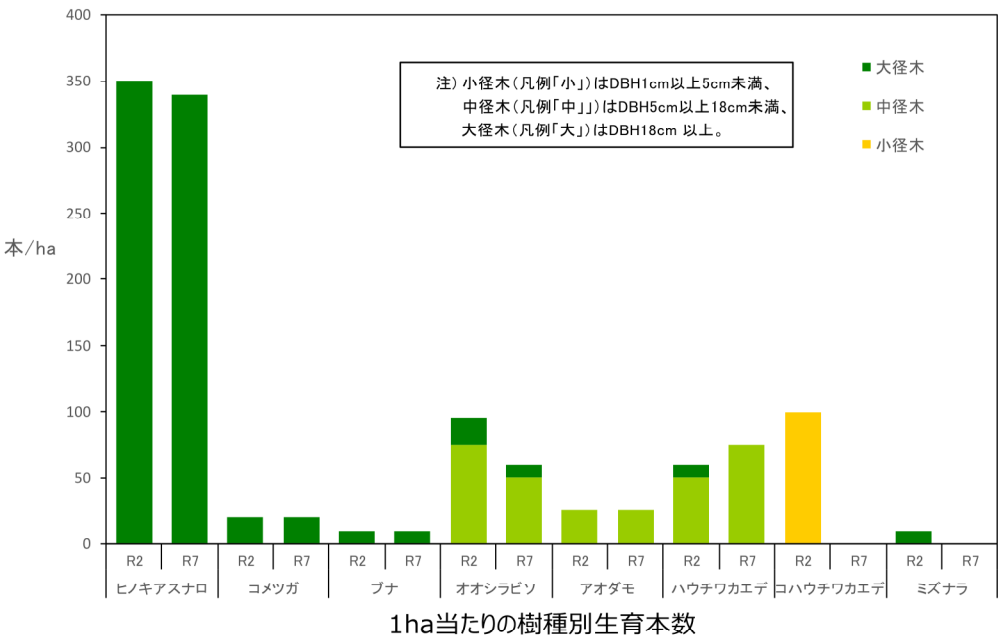
樹種	生育本数(本/ha)		本数割合	
	R2	R7	R2	R7
ヒノキアスナロ	350	340	52.2%	64.2%
コメツガ	20	20	3.0%	3.8%
ブナ	10	10	1.5%	1.9%
オオシラビソ	95	60	14.2%	11.3%
アオダモ	25	25	3.7%	4.7%
ハウチワカエデ	60	75	9.0%	14.2%
コハウチワカエデ	100	0	14.9%	0.0%
ミズナラ	10	0	1.5%	0.0%
8種	670	530	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種及び保護対象種を示す。

- ・ヒノキアスナロ大径木1個体が消失していた。
- ・コメツガやブナの大径木やアオダモの中径木の生育本数に変化はなかった。
- ・オオシラビソは大径木及び中径木ともに減少した。
- ・大径木のミズナラは風害により消失した。
- ・小径木のコハウチワカエデはおそらく自然枯死により消失と考えられる。



林内の景観



1ha当たりの樹種別生育本数

デザインに関する評価

基準	指標	結果
気候帯又は森林帯を代表する 原生的な天然林を主体とした 森林が維持されている	原生的な天然林等の構成状況	森林タイプの分布に大きな変化は確認されなかった。 ・プロットNo.1では、ブナなどの主要樹種の生育状況に大きな変化はなく、おおむね健全な状況であった。 ・プロットNo.2では、主要樹種であるヒノキアスナロの生育状況に大きな変化はなく、おおむね健全な状況であったが、大径木1本が消失していた。 ・大径木のミズナラが倒れたことにより林冠ギャップが生じたが、主要樹種をはじめその他の樹種に大きな影響はなかった。

早池峰山周辺森林生態系保護地域

実施した調査

資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査

価値

森林詳細調査 下層植生調査の結果
プロットNo.1

年度	N区		S区		重要種 ^注	
	R2	R7	R2	R7		
調査区	R2	R7	R2	R7	環境省RL	岩手県RL
低木層の植被率(%)	0	80	0	80		
低木層の優占種	-	チシマザサ	-	チシマザサ		
草本層の植被率(%)	90	10	90	20		
草本層の優占種	チシマザサ	ミヤマカンスゲ	チシマザサ	ミヤマカンスゲ		
出現種数	12	7	10	13	0	0
チシマザサ	○	○	○	○		
ミヤマカンスゲ	○	○	○	○		
シラネウラボ	○	○	○	○		
オオカメノキ	○	○	○			
オククルマムグラ	○		○	○		
オシダ	○	○	○			
ツタウルシ	○		○	○		
イワガラミ		○		○		
コシアブラ		○		○		
アカイタヤ			○	○		
タケシマラン	○			○		
タニギキョウ	○			○		
ツルアジサイ	○		○			
トチノキ	○		○			
ミヤマシダ	○		○			
オオカニコウモリ		○				
カツラ				○		
カラクサシダ				○		
キョウタシダ		○				
コミネカエデ				○		
ジュウモンジシダ				○		
ミヤマノキシノブ				○		
カニコウモリ	○					
ギンリョウソウ			○			
ツルシキミ	○					

注) 重要種の選定基準等は以下の通りである。
環境省RL:「環境省レッドリスト2025の公表について」(令和7年、環境省) 該当無し
岩手県RL:「岩手県レッドリスト(2024年度)」(令和6年、岩手県) 該当無し



N 区



S 区

- ・チシマザサが優占している状況に変化はなかった（今回は生育高から低木層として記録した。写真等の比較から、前回も同様の生育高であったと考えられる）。
- ・被度の低い種に増減があったが、ほかに目立った変化はみられなかった。
- ・ミヤマノキシノブやカラクサシダなどの着生植物が多数確認された。

プロットNo.2

年度	N区		S区		重要種 ^注	
	R2	R7	R2	R7		
調査区	R2	R7	R2	R7	環境省RL	岩手県RL
低木層の植被率(%)	0	40	0	40		
低木層の優占種	-	ヒノキアスナロ	-	ヒノキアスナロ		
草本層の植被率(%)	40	20	30	10		
草本層の優占種	ヒノキアスナロ	ミヤマカンスゲ	ヒノキアスナロ	シノブカグマ		
出現種数	15	13	16	17	0	1
ヒノキアスナロ	○	○	○	○		
アオダモ	○	○	○	○		
チシマザサ	○	○	○	○		
ツルアジサイ	○	○	○	○		
トウゲシバ	○	○	○	○		
フナ	○	○	○	○		
シノブカグマ		○	○	○		
ツルツゲ		○	○	○		
ナナカマド	○	○	○			
オオシラビソ	○	○		○		
コシアブラ	○			○		
タケシマラン			○	○		
タニギキョウ			○	○		
ツルアジサイ	○	○				
ミネカエデ	○			○		
ミヤマカンスゲ	○	○				
ヤマソデ		○				
コメツガ	○		○			
ダケカンバ				○		
タムシバ				○		
ハイマツ				○		
ホソバナラシダ				○		
カエデ属の一種		○				
イワガラミ			○			
オオカメノキ	○					
オオバクロモジ	○					
ギンリョウソウ	○					
リウツギ			○			
ヘビノネゴザ			○			
ムラサキヤシオ			○			

注) 重要種の選定基準等は以下の通りである。
環境省RL:「環境省レッドリスト2025の公表について」(令和7年、環境省) 該当無し
岩手県RL:「岩手県レッドリスト(2024年度)」(令和6年、岩手県)



N 区



S 区

- ・低木層の優占種は前回と変わらずヒノキアスナロの幼齢木であった。
- ・草本層ではミヤマカンスゲやシノブカグマなどの被度が比較的高く、被度の低いタムシバやオオカメノキ等については消長が確認された。

早池峰山周辺森林生態系保護地域

実施した調査 資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査

価値 野生動物の生息状況

確認された哺乳類

No.	科名	種名	R2	R7	環境省RL 2020	岩手県RL 2024
1	ネズミ	ネズミ科の一種		○		
2	ウサギ	ニホンノウサギ		○		
3	イヌ	タヌキ		○		
4	クマ	ツキノワグマ	○	○		留意
5	イタチ	ニホンテン	○	○		
6		アナグマ		○		
7	シカ	ニホンジカ	○	○		
計	6科	7種	3種	7種	0種	1種

注1) 種名および種の配列は「世界哺乳類標準和名目録(2018 日本哺乳類学会)」に準拠した。
注2) 種の特定が困難なものは科や属で示し、同科・属が確認された場合には種数に計上しなかった。
注3) 重要種の選定基準等は以下の通りである。
環境省RL:「環境省レッドリスト2020の公表について」(令和2年、環境省)
岩手県RL:「いわてレッドデータブック レッドリスト(2024年度)(哺乳類)」(令和6年、岩手県)

- ・今回調査では、ネズミ科の一種、ニホンノウサギ、タヌキ、ツキノワグマ、ニホンテン、アナグマ及びニホンジカが確認された。
- ・ニホンジカの撮影枚数は前回調査が254枚、今回調査が191枚であった(カメラの稼働日数が異なるため)。
- ・RAI(撮影頻度指数)、前回調査では0.485であり、一度に写った最大頭数は2頭であった。一方、今回調査では0.805と増加した。最大頭数は3頭であった。

※RAI: 30分以上の間隔を開けて確認された個体数の合計/カメラの稼働日数

カメラNo.	年度	30分を一区切りとした撮影回数	映り込んだ最大頭数	撮影個体数	稼働日数 (設置・回収日含む)	RAI (撮影頻度指数)
No.1	R2	4	2	5	29	0.172
	R7	81	3	88	105	0.838
No.2	R2	35	2	42	68	0.618
	R7	79	2	81	105	0.771
合計	R2	39	2	47	97	0.485
	R7	160	3	169	210	0.805

※RAI: 30分以上の間隔を開けて確認された個体数の合計/カメラの稼働日数
30分以内に写った個体は同一個体と仮定する(ただし、明らかに雌雄が異なる、成獣と幼獣で確実に異なる場合はそれぞれカウントする)

ニホンジカのRAI分析(撮影頻度指数)

撮影状況



ネズミ科の一種(2025年9月6日)



ニホンノウサギ(2025年8月9日)



タヌキ(2025年8月25日)



ツキノワグマ(2025年10月20日)



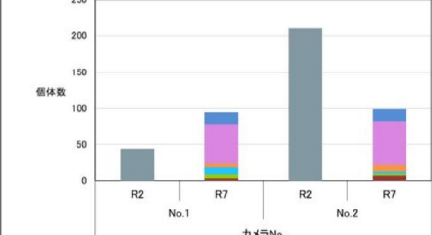
ニホンテン(2025年9月18日)



アナグマ(2025年9月26日)



ニホンジカ(2025年9月23日)



ニホンジカの性・年齢クラス別撮影枚数

早池峰山周辺森林生態系保護地域

実施した調査	資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査
--------	----------------------------------

価値 野生動物の生息状況

確認された鳥類

No.	科名	種名	R2	R7	環境省RL 2020	岩手県RL 2024
1			○	○		
2	アマツバメ	アマツバメ	○	○		
3	カッコウ	ホトトギス	○	○		
4		ツツドリ	○			
5	ハト	アオハト	○	○		
6			○			
7	キツツキ	コゲラ	○	○		
8		アカゲラ	○	○		
9			○			
10		ハシブトガラス	○	○		
11	シジュウカラ	ヒガラ	○	○		
12		ヤマガラ	○	○		
13		コガラ	○	○		
14		シジュウカラ	○	○		
15	ツバメ	イワツバメ	○			
16	ウグイス	ウグイス	○	○		
17		ヤブサメ	○	○		
18	エナガ	エナガ	○	○		
19	ムシクイ	センダイムシクイ	○			
20		メボソムシクイ	○	○		
21	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	○	○		
22				○		
23	ツグミ	トラツグミ		○		
24		クロツグミ		○		
25		シロハラ		○		
26		ツグミ	○			
27	ヒタキ	コルリ	○	○		
28		キビタキ	○	○		
29		ルリビタキ	○	○		
30	アトリ	アトリ	○			
31		ウソ	○			
32		カワラヒワ		○		
33		マヒワ	○			
34			○	○		
計	17科	34種	29種	25種	0種	4種

注1) 種名および種の配列は「日本鳥類目録 改訂第8版」(2024年、日本鳥学会)に準拠した。
注2) 重要種の選定基準等は以下の通りである。
環境省RL:「環境省レッドリスト2020の公表について」(令和2年、環境省)
岩手県RL:「いわてレッドデータブック レッドリスト(2024年度)(鳥類)」(令和6年、岩手県)

・確認種数は25種であった。

病虫・鳥獣・気象害の発生状況

項目	結果
病虫害	・プロットNo.1 記録なし ・プロットNo.2では、ヒノキアスナロやミズナラ、オオシラビソ等に虫害あるいは寒風害等の可能性がある個体を確認。
鳥獣害	・プロットNo.1では、一部シウリザクラやオオカメノキ等にニホンジカの食害の可能性がある個体を確認。 ・プロットNo.2ではシノブカグマ等の草本類にニホンジカの食害の可能性がある個体を確認。
気象害	・プロットNo.1 記録なし ・プロットNo.2では、ヒノキアスナロやミズナラ、オオシラビソ等に虫害あるいは寒風害等の可能性がある個体を確認。

価値に関する評価

基準	指標	結果
森林生態系からなる自然環境の維持、野生生物の保護、遺伝資源の保護が図られている	野生生物の生育・生息状況、森林の被害状況	下層植生では、ニホンジカの食害が確認された。
		外来種は確認されなかった。
		野生動物調査では、生態系の上位種が確認された。
		ニホンジカによる食害が木本植物から草本植物で確認された。 虫害や寒風害等も確認された。

早池峰山周辺森林生態系保護地域	実施した調査	資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(2箇所)、哺乳類・鳥類調査
-----------------	--------	----------------------------------

利活用

- ・11本の学術論文が確認された。
 - ・「早池峰山のアカエゾマツ自生南限地における動態予測（浅瀬石ほか、2023）」
 - ・「早池峰山のアカエゾマツ南限自生地における主要構成種の個体成長と動態（浅瀬石ほか、2022）」
 - ・「早池峰山周辺地域におけるニホンジカ対策（服部ほか、2020）」 など

利活用に関する評価

基準	指標	結果
森林施業・管理技術の発展、学術の研究等に利用されている	学術研究での利用	学術研究等への利用が11件確認された。

管理体制

- 【三陸北部森林管理署】
 - ・林道等点検、植生保護柵の維持管理業務、登山道沿いの貸付地確認等において不定期に巡視を行い、現況等を確認・把握している。
 - ・外来種対策として、「早池峰山地域保全対策事業推進協議会」と連携し、移入植物（セイウタンポポ、オハバコ、オハコグソウ）の駆除作業を毎年実施している。
 - ・「早池峰地域保全対策事業推進協議会」と連携し、高山植物盗採防止合同パトロールを実施している。 など
- 【岩手県県南広域振興局保健福祉環境部環境衛生課】
 - ・官民協働により、マナー啓発、盗採防止パトロール、移入種駆除及び路上等駐車対策の取組みを実施している。
 - ・東北森林管理局と協同で、早池峰山周辺地域ニホンジカ生息状況・植生調査を実施し、高山植生の保護のため、植生保護柵設置と検証を行っている。 など

管理体制に関する評価

基準	指標	結果
適切な管理体制が整備されている	保護林における事業・取組実績、巡視状況等	・関係機関により保護林及び周辺地域において林道点検、林野巡視等が行われている。 ・毎年外来種対策が実施されている。 ・希少植物等の食害圧が高まっていると考えられ、維持管理のさらなる実施が求められている。

まとめ・考察

現地調査結果総括・考察

プロットNo.1		
調査年度		
調査日		
プロット情報		
斜面方位、傾斜(平均)		
局所地形		
段階		
林分状況		
林分等の状況		
林況写真		

※前回調査のセルの「-」は、記録なしを示す。

・主要樹種であるブナが優占する成熟した森林が維持されており、林分はおおむね安定して生長している。
・下層植生にも大きな変化はみられず、
を
はじめ、着生植物も確認されたことから、林内の空中湿度が高く、良好な環境条件が保たれていると考えられる。

プロットNo.2		
調査年度		
調査日		
プロット情報		
斜面方位、傾斜(平均)		
局所地形		
段階		
林分状況		
林分等の状況		
林況写真		

※前回調査のセルの「-」は、記録なしを示す。

・ヒノキアスナロが優占する成熟林となっており、林分はおおむね安定して生長している。
・過去の資料より、寒風害の影響を受けやすい林分であることが推察されるが、今回ミズナラ大径木が倒木し、林冠にギャップが生じていた。
・その他の立木や下層植生には大きな変化はみられず、林床では
も確認されており、おおむね良好な林分状態が維持されている。

・両プロットにおいて低木へのニホンジカによる剥皮や草本類への食害が確認されており、今後、更新木の成長や下層植生への影響について継続して注視していく必要がある。

【哺乳類調査】

・今回は6科7種の哺乳類が確認された。新たに4種（ネズミ科の一種、ニホンノウサギ、タヌキ及びアナグマ）が確認されたが、今回調査の方がカメラの稼働日数が長いためと考えられる。

・稼働日数を考慮したRAI（撮影頻度指数）は、前回調査では0.485、今回調査では0.805と大きく増加した。このことは本保護地域におけるニホンジカの個体数増加及び個体数密度は高くなっていることを示唆している。

【鳥類調査】

・鳥類相に大きな変化は認められなかった。

・鳥類調査で確認された25種のうち、20種は前回調査においても確認された種であり、ヤブサメやコルリ、
といった山地帯のササ藪を繁殖地として好む種が継続して確認されている。調査地域はこれらの種にとって好適な生息環境が保持されていることが示唆される。

まとめ・考察

全体まとめ

- ・プロットにおいて低木へのニホンジカによる剥皮やシノブカグマ等草本類への食害が確認されており、今後、更新木の成長や下層植生への影響について継続して注視していく必要がある。
- ・林相等に大きな変化はまだみられないものの、ニホンジカのRAI（撮影頻度指数）が令和2年度では0.485、本調査では0.805と倍増しており、本保護地域に生息するニホンジカの個体数増加及び密度が高くなっていることが明らかになった。
- ・ニホンジカによる食害が確認されており、低木の剥皮による影響や下層植生の減少等が懸念される。
- ・ヒノキアスナロやミズナラ、オオシラビソ等に病虫害、気象害も確認された。

評価と今後の対応

項目	結果・対応等
今回の評価を踏まえた 今後の対応について	・定期的な巡視を継続 ・5年後にモニタリングを実施
保護・管理及び利用に関する事項 （保護林管理方針書）	保存地区については、原則として人手を加えずに自然の推移に委ねるものとする。保全利用地区については、木材生産を目的とする森林施業は行わないものとする。保全利用地区については、木材生産を目的とする森林施業は行わないものとする。 <u>ニホンジカの食害による森林生態系への影響が確認されているため、引き続き関係機関と連携して、ニホンジカ対策に取り組んでいく。</u>